

平成29年度 【 学園研究費助成金 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ハナリ タカシ
氏名 羽成 隆司

研究期間 平成29度

研究課題名 性的指向、身体接触経験、他者への接触回避の関連

研究組織

| | 氏名 | 学部 | 職位 |
|-------|------|--------|----|
| 研究代表者 | 羽成隆司 | 文化情報学部 | 教授 |
| 研究分担者 | | | |
| 研究分担者 | | | |

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

本研究は、これまで申請者が行ってきた「対人的嫌悪感」や「接触回避」に関わる心理学的研究の継続である。身体接触の受容・回避の特徴を調べた我々の研究では、女性の同性に対する高い受容性と異性に対する高い回避性が認められてきた。本研究では、対人的身体接触への受容・回避傾向、性的指向、これまでの性的身体接触経験との関連をより詳細に分析することを目的とする。具体的には、女性の性的指向性において両性愛的傾向を自覚している者の接触回避傾向を中心に分析する。

2. 研究の推進方策 (300字程度で記述)

調査対象者：女子大学生451名を調査対象とした。平均年齢は18.97歳(SD=.98)であった。
調査方法：性的指向を測定する16項目(中学生時代から現在までの恋愛経験、性的接触等)、異性・同性それぞれに対する身体接触への抵抗感を測定する8項目、他者同士が身体接触をすることに對する抵抗感を測定する6項目、河野(2013)らによる接触回避尺度、および、回答者の性的指向(異性愛者、同性愛者、両性愛者、無性愛者)を尋ねる項目を設定した。大学の授業時に質問紙調査への協力を打診し、承諾を得られた受講者について回答を依頼した。[結果の整理] SPSS ver.23 を使用してデータ分析を行った。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究で示された結果は下記の通りである。

- 1) 女性全体では同性（女性）に対する身体接触は、異性（男性）に対する身体接触よりも受容的ではあるが、性的な接触（キスや性交）に関しては回避的であることが確認された。
- 2) 自分以外の異性・同性同士の接触については、同性同士の接触に対してより寛容であった。
- 3) 嫌悪する対象者を想定しての身体接触への抵抗については、同性に対しての方が回避の程度が小さく、より受容的である傾向がここでも確認された。
- 4) 自覚する性的指向の割合は、異性愛 83.8%、同性愛 0.7%、両性愛 6.0%、無性愛 3.1%であった。

該当する人数が少ない同性愛者を除いての特徴は以下の通りであった。

- 5) 異性愛者は同性に対して受容的であるが、性的な接触には一定程度の回避を示した。嫌悪対象者においては、同性に対してより受容的であった。
- 6) 両性愛者は、異性・同性いずれに対しても他の性的指向者より受容的であった。また、同性、異性いずれの嫌悪対象者にも他より受容的であった。
- 7) 無性愛者は、異性・同性いずれに対しても最も接触回避の程度が高かった。嫌悪対象者においても、異性・同性ともに最も回避的であった。
- 8) 自分以外の異性・同性同士の身体接触においては、異性愛者は、同性に対してより寛容的であった。両性愛者は、異性・同性いずれに対しても寛容的であったが、無性愛者は、異性・同性どちらにも回避的であった。

以上から、同性・異性に対する身体の接触回避の程度は、性的指向によって異なる特徴を示すことが明らかになった。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

| | | | |
|---------|-------|-------|-----|
| ①同性愛的傾向 | ②接触回避 | ③性的志向 | ④性差 |
| ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ |

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

今後の研究成果公開予定

次年度の文化情報学部紀要での公開を予定している。